

チベットにおける破仏

稲葉正就

古代チベットにおいて破仏が三回行われた。第一回は、チンドンデツェン王が西紀七五四年に一三歳で即位した時に大臣たちによって行われた(第二詔勅・TTK. p. 98. 佐藤七七五頁)。

側近のゲンラムルコンが、前王を弑した宰相バルドンツァブとランニェンクを翌七五五年に打ち破った(ポタラ碑南面文・AHEL. pp. 16, 17. 佐藤五〇三頁)。逆臣を除いて勢力を得たルコンは、チベット古来のボン教の信奉者であったため仏教を禁じたと思われる。ところが王は、二〇歳になり災と凶兆があったので崇仏政策をとらしめた(第二詔勅・TTK. p. 98. 佐藤七七五頁)。プトン史によると、この時に反仏教の大匠マシヤントムバキエを穴埋めにして殺したという。

第二回の破仏は、チソン王の子チデソンツェン王が七九八年に即位した時に占卜と夢見に基いて行われた(カルチュン詔勅・TTK. p. 101. 佐藤七七六頁)。実際は、宰相ゲンラムタラルコンと王の母后ツェボン氏マルギェンが熱心なボン教信奉者であったからと考えられる。チソン王の七六三年にチベット軍が唐の都の長安を占領したが、その大策を王に捧げたのが先の破

仏を行ったルコンであり、司令官として大活躍したのがこのタルコンであった(ポタラ碑南面文・AHEL. p. 17. 佐藤五三三頁)。リチャードソンは同一人と見做しているが(AHEL. p. 11. チソン王の第一詔勅の最後に(TTK. p. 97). 宰相の次に大臣としてタルルコン、内大臣たちの中に大臣ルコンの署名が見えるから、私は二人と考えたい。いずれにしてもボン教派のゲンラム家から武功ある宰相が出て再び破仏政策がとられた。八〇二年頃に宰相が交代しているから、その頃に破仏が了つたとすれば、僅か四年間ほどに過ぎなかつたことになる。

第三回の破仏は、八三六年にチデ王の子チツクデツェンレーパチェン王が弑され、その弟ランダルマ王が立つて行われた。その原因は、レーパチェン王の仏教保護が熱烈過ぎたことと、仏僧が政治に参与して貴族に怨恨をかつたことである。僧ニヤンティンゲンジンはチデ王の時から政治輔佐した(シャイラカン碑文・TIZ. I. p. 152. 佐藤七八二・三頁)。また八二二年の長慶の会盟に唐より使した劉元鼎が、王の右側に鉢髻通 Dpal chen po という仏僧が立ち宰相は台下に列するのを見た(冊府元龜九八一外臣部盟誓)。この仏僧はランカンユテンで最高の地位に就いていたことがわかる(佐藤七一七頁)。パーギェルトレは陰謀をめぐらしてこれらの仏僧を殺し、王を弑してランダルマ王を立て、自らは宰相の位に就いて、破仏を行った。この破仏は徹底したもので、やがて仏教徒によりランダルマ王も暗殺されたが、その後王家の分裂崩潰とともに暗黒時代に入った。これら三回の破仏を眺めると、古代チベットの仏教受容時代の出来事であったから、古来のボン教か外来の仏教かという問

題をめぐって、王を中心として皇后や大臣たちが争った結果行われた。一面より考えれば、貴族間の勢力争いに宗教が正当化の具に供せられたといえる。ただ最後の破仏のみは仏僧の政治参与に対する怨恨という点が加わっている。破仏の結果としては、前二回は却って仏教を隆盛ならしめた。最後の破仏は余りにも徹底的であったため、仏教は一世紀余も起ち上ることができなかつた。しかし中世には、サキヤムやダライラマのような政教一致の強力な形態へ向って起ち上るのである。

以上三回の破仏は外部からの弾圧に原因したものであるが、破仏の意味を更に広くして、仏教内部より和を破ることも含めるならば、前述の第一・二回の破仏の中間に、インド僧と中国僧の争いをあげねばならない。チベットへ入った多くの两国僧が互に争い、遂に殺しあうに至つたので、チソンデツェン王は両方から代表を出して論戦せしめることにした。それは七九二——七九四年に亘って行われたが (CL. p. 176) インド側が勝ってチベット仏教を独占することになった。その裏には、王が中国の禪の虚無的な点と中国僧の政治的な一面を嫌い、また王の母后と同じナナム氏出身の宰相シャンギェルツェン(尚結贊)が平涼の偽盟(七八七年)という史上稀な奸計を以て中国の勇将を捕えようとした(阿唐書吐蕃伝)ほどの中国敵視者であつたので(佐藤八〇六頁)、わざわざインドから中観派の大立者蓮華戒を招いて勝たせたと想像できる。この結果は、中国側は追放という致命傷を負つたし、勝つたインド側も怨みのため蓮華戒などが殺されるという悲劇を見た。もし双方が争わず団結していたならば、僅か四年後に行われた第二回の破仏を阻

止できたかもしれない。とにかく、外部からの弾圧は却って仏教を隆盛へと向わしめたが、内部の破仏行為はその反対の結果をもたらしたといえよう。

佐藤——佐藤長「古代チベット史研究」下巻 昭和三四年。

AHEL——H. E. Richardson: Ancient Historical Edicts at Lhasa. London, 1952.

TIZ——H. E. Richardson: Tibetan Inscription at Zva-hi Lha Khan, JRAS, Part 3, 4, 1952, Part 1, 2, 1953.

TTK——G. Tucci: The Tombs of the Tibetan Kings. Rome, 1950.

CL——P. Demiéville: Le concile de Lhasa. Paris, 1952.

### 諸仏常法について

春日 礼 智

釈尊の出世は、我々に色々なことを考えさせる。先ず最初に、仏陀 (Buddha) 即ち真の自覚者の地上への出現ということである。人間に真の自覚者があるか、ないかは大きな問題であるが、釈尊以前にも、以後にもないというのが歴史的事実である。たとい舍利弗、目連が羅漢を証しても、阿羅漢の悟りの内容は同じでも、仏陀の心境と、舍利弗、目連の心境との間には、近くても、及び難い差があつたことは事実で、そこに、仏と羅漢の区別がはっきりしているのである。しかし、理論的に